

イルにむかつかつのである。したがって、若者の私化現象に問題があるのではなく、古い世代の文化と若者の文化とのずれに問題があるのではなからうか。ディシプリン権力が構成する差異としての「私」とディシプリン権力によるその構成に反響するかのように生じる若者のライフスタイルとしての「私」、この二つの「私」はどのように絡むのだろうか。私がなぜこの問題にこだわるのか。それは、近代学校が支配的文化を同化するためのディシプリン権力であったという事実——しかも近年それが巧妙かつ強固になりつつある——にこだわっているからである。

河上氏は、エピローグで、学校のジレンマとして、平等と選別、自由と秩序、

■ 書 評 ■

宮島 喬 著

『文化的再生産の社会学——ブルデュー理論からの展開』

◆四六判 300頁, 2500円

東洋館出版社

個人性と集団性を挙げているが、私見ではこの問題は勝負がついていると思う。近代学校以来、学校は支配的文化と結合したディシプリン権力（序列化された監視のシステム、規格化と差異化、試験）によって客観的には、生徒を選別し、強制し、差異化（個別化）しながら集団化してきた。これが学校教育の客観的な構造（structure）である。しかし、これと教師の行為（agency, pratique）とはいちおう分けて考えるべきであろう。この構造と行為との関係を問うことをとおして、教師世界の实像が明らかになるのではなからうか。

新潟大学 井上正志

E・デュルケムの『社会学的方法の規準』や『自殺論』の邦訳者として名高い宮島喬氏によって、このたび『文化的再生産の社会学』が出版されたことは誠に喜ばしいことである。

あの難解な、ブルデュー学派のほぼ30年にわたって蓄積されてきた、経験的・理論的な多くの成果が、「文化的再生産」という視角から実に手際よくまとめられている。これはフランス社会学に通暁している宮島氏ならではの成書であり、経験的事象にくりかえし反省を加えながら

上向していくP.ブルデューの、晦澁ともいえる理路に一度ならず立ち往生した経験ある者なら誰しも、ブルデューに即してブルデューを越えいく、あざやかな氏の社会学的手法に賛辞を送りたくなることだろう。「あとがき」にあるように、著者にとって「一書にまとめることはなかなか思い切りがつかず、実に苦しかった。この本を公刊できることの喜びよりも、むしろ不安のほうがはるかに先に立つ」ともらされているが、ブルデューの理論がトータル・サイエンスの性格をも

っだけに、氏の言葉は、なおのこと掛け値なしに好感をもって受け入れられよう。「この本が月満ちて生まれた成熟児なのか、それとも早産の未熟児なのか」、にわかには評者にも判断しがたいが、それでも本書が現在の教育社会学の理論的研究と実証主義的研究の分裂状況をうめるにたる一石を投じた書であることだけは確かである。

戦後の“教育事象”研究について振り返ってみると、教育の制度的・構造的な研究と学習の内容的・方法的な研究とが分離したまま進行してきた傾向にあり、それら二つを社会的「存在」や「場」の「実践」から再統合をはかる「関係主義」がそれほど共有されてきたようには思えない。たしかに、学校と大学の「教育機会」をめぐる大量の経験的・実証主義的なデータから「国民教育システム」の選別と排除のメカニズムが推定されてきた経緯は積極的に評価されてよい。にもかかわらず、そうしたメカニズムが、「日本文化」に内在する不可視の関係としてある、人びとの日常の「実践」と接続されて解明されているとはとても言いがたい。実情は相も変わらず一方では、近代啓蒙主義の「教え込み」の実践がはびこり、他方では、「選別と排除のメカニズム」が生成する社会構造を実証的に追認している、と言えれば暴論にあたるであろうか。

ブルデュー理論の意義は、近・現代の陥穽ともいうべき主客二項対立の手前で、新たな「社会的実践」を見出し構成することにあるのだが、これまでブルデューに言及される割には、ブルデュー理論の認知的・社会的構造の「発生論

的」意義が活かされてはいないのではないだろうか。この点、宮島氏の“社会学的行為”は、文字どおりハビトウス＝行為」一元論に立っている。型どおりの「文化的再生産論」を抜け出て動的に再構成するなかで、行為者のダイナミックな物質的・象徴的な営為の可能性を明らかにしようとしている。それに加えてさらに、本書の後半部では、「エスニシティと文化的再生産論」、日本社会の「ジェンダーの再生産」という非常に重要で興味深い分析にまで論及しているのである。

最近では、ブルデューの著書がかなり多く翻訳されたおかげで、そのキー・コンセプトがよく知られるようになってきている。しかし、素朴実証主義による学問の切り刻みでは人間の社会的実践を把握できないこと、広い意味の実践 (pratique) の把握のためには、「方法的関係主義」に立つことによって、「ハビトウス」と「場・戦場」(champ) との弁証法に根ざしていろいろな「資本」の構成と変換のメカニズムが解明されるべきこと、このことは自ずと、「反省性」と「批判性」に裏打ちされたトータルな社会科学を要請すること、こうした観点がいまだ十分に認識されているとはいえないのである。宮島氏も経験的アプローチを重視しながらも素朴客観主義には批判的である。「素朴な客観主義に拠る者にとっては、選別の過程とは、ある客観的に定立された普遍的水準によって、事物ないし人が選り分けられていく、ほとんど機械的な過程としてイメージされよう。ブルデューがなによりも乗り越えをめざすのは、このような見方である。いわゆる

「能力主義」や「メリトクラシー」の神話への社会学的批判がブルデューの作業の重要な部分をなしている。そして宮島氏はブルデューの「社会学的認識論の旗幟鮮明な主張」を、おおすじつぎの3点に要約している。①主観主義と客観主義の対立の乗り越え、②あらゆる社会的過程を力の関係と象徴的正統化との相互作用のうちにとらえるべきだとの主張、③社会文化的決定作用を一定の行動や表象の形式へと変換していく、行為者の性向の媒介的な作用の重視(86-87頁)。このように氏の方法論的な視軸も、主客二元図式の乗り越えにあるのであって、このことは、気鋭の社会学者L.ワカントの、ブルデューとの共著 *An Introduction to Reflexive Sociology*, 1992, においても明白である。ちなみに示せば、ワカントの確認するブルデュー理論の特徴は、つぎの事項にわたっている。①客観主義と主観主義の対立図式の乗り越え、②社会物理学と社会現象学の対立の乗り越え、③象徴的な権力による多様な形式と機制の発生論的な解明、④社会構造と認知構造の弁証法に根ざす方法論的關係主義による社会理論と社会調査の架橋、である。

わずかに残された以下の紙幅で、許されるかぎり、「ブルデュー理論からの展開」(副題)の主な論点を取り上げておこう。本書は三部構成になっている。まず序論において、「なぜ文化的再生産論」かを問うことによって、本書全体の問題群を見通している。基本的には、「文化を通して、またそれによって正統化される社会的選別、その前提および結果としての

不平等を批判的に解明する、『近代』の幻想批判の社会理論」を示すことにある。ここでは、ブルデュー＝パスロンにしたがって、「再生産」「変換」「実践的であること」「ハビトウス」「場」「文化資本」「戦略」などの基礎的概念がたんねんに説明されていくことで、「国民国家における規範化された文化」の「エスノセントリズム」批判にまで導かれることになる。

第I部「文化的再生産の射程」では、「再生産論としての教育論の構造」を中軸にすえ、選別と排除の社会過程を分析している。いま「文化」を「ある行動のパターンを正統なもの、意味あるものとしてとらしめるような、集団の成員諸個人に共有された価値—象徴のシステムとして理解しておくならば」(29頁)、「文化的再生産の観点から、社会化のパターンのちがいの所産にすぎないものが、なぜ……優—劣のヒエラルキーに変換されていき、しかもそうした変換が『正統』なものともみなされうるのか、を説明しなければならない。その場合、学校において規範化されている文化がどのような性質のものであり、なぜそれがしばしば『中立』で『正統』なものとして表象されるのか」(35頁)。この「学校文化」をとらえるうえで、「言語ハビトウス」「選別の度合」(degrés de sélection)「自己選別と自己排除」「言語資本」「選別要因の布置連関」「正統的身体」という重層的要因を考慮せねばならないが、とりわけて重要なことは、「文化を通して、いいかえると正統化の象徴過程を通して行使される社会秩序の維持——広義における支配——のメカニズムの批判的解明である」

(79頁)。

「制度や行為者およびその機能を、象徴的なレベルで正統化するという作用の社会学的な解明」「学校にしる、教師にしる、流行の伝播者にしる、それらが伝えようとする意味（文化的恣意）を人びとに受容させることができるのは、一定の権威の関係という社会関係を前提とし、かつその関係が、たとえば『無私』、『中立』、『真理の伝達』といった表現で象徴的に正統化される（誤認される）という条件のもとにおいてである……。『正統性』の表象の背後にある、力関係の作用と象徴化による隠蔽の作用という二重の過程と連関をつねに問うこと、これが正統性の問題への社会学的接近にほかならない」(101頁)。

第Ⅱ部「ブルデュー理論からの展開では、上の「正統性」の問題がさらに掘り下げられて、人びとの身体に刻みこまれた社会のみえない構造と、さまざまな権力関係、すなわち力の優劣による非対称的な関係との意識されざる「象徴的な」効果や「共謀する関係」の両義的な性格が分析されている。とかく誤解の多い「再生産」概念であるが、このようなコミュニケーションの「隠された力関係」という先行条件を、新たな「文化的再生産」過程にくみこむ作業が、「社会的な場（ex. 学校、試験場、役所、法廷、

等々）」の「潜在レベルのメッセージ」にまでたち入って検討されている。要するに、「力の関係を意識させないことに成功するかぎりで〔このコミュニケーションが〕成立する。……この力の関係が覆い隠されれば覆い隠されるほど、固有の意味で『象徴的な』効果を生じることができる」(117頁)のである。

こうした着眼は、第Ⅲ部「ハビトウスとしての文化」でも主旋律をなし、ブルデュー＝パスロン『再生産』の「すべての教育的働きかけは、恣意的権力による文化的恣意の押しつけとして、客観的には、象徴的暴力（*violence symbolique*）である」という主題を具体的に展開し論証するものとなっている。「教場のなかの教師は論証も例証も容易ではないような知をばあいによっては理屈ぬきで生徒に教え込み、これを受け入れさせることもできる。そしてこのような場合、生徒たちの側に習得されているいわゆる学校的ハビトウスが、この受け入れの装置としてはたらくわけである。ブルデューたちが『教えこみ』のコミュニケーションを、教えられるものの恣意性と教える様式の恣意性という二重性においてとらえているのはほぼこのような意味であるといえよう」(301頁)。

◆A5判 318頁, 3900円
藤原書店